宮崎　四旬節黙想会

宮崎教会で3月2、3日の2日間、四旬節の黙想会が行われました。指導して下さったのは小寺佐千夫神父様（オプス・デイ属人区）です。

お話の中で心に響いたのは「与える人になりましょう」という言葉でした。「与えるのは物ではなくて心です。与えるとはあげること。話を聞いてあげる、慰めてあげるなど、できることはたくさんあるでしょう。」

幼稚園で働く私は、子どもたちの姿が急に浮かんできてはっとしました。子どもは『おもちゃを貸してあげる』『泣いてる子に優しくしてあげる』『困っている友達を手伝ってあげる』ということを当たり前に行っています。子どもこそ与える人として生きていたのです。はたして自分は与えてきたのかと振り返ると、恥ずかしく居心地の悪い感じがしました。子どもたちの笑顔で癒やされ元気をもらい、時には教えられ諭されています。偉そうに彼らの前に立っていなかったかと反省しました。

小寺神父様の温かい語り口が心地よく、すっと心の中に言葉が届きました。私も与える人になりたいと思います。ありがとうございました。

山口清美
（宮崎教会信徒）

能登と高山右近

２０２４年の正月、能登半島を中心に起こった能登半島地震では、２４０人以上の人が亡くなり、未（いま）だに多くの方々が避難生活を余儀なくされている。その能登の地は今から４２０年前には２０１７年に列福されたユスト高山右近と縁が深い土地である。加賀百万石で有名な前田利家と友人であり、右近がキリシタンの信仰が故に追放された時には利家が金沢に招いている。かつては敵として２度も戦ったことがあるにもかかわらず行き場のない右近を自分の近くに招き寄せたのも２人の友情の絆（きずな）と右近の人徳のせいでもあったであろう。利家の厚意に対して、「禄（ろく）は軽くとも苦しからず、耶蘇（やそ）寺一カ寺建立下さらば参るべし」と言って、１５８８年家族とともに金沢へ迎え入れられた。36歳の時であった。キリシタン迫害を加えた豊臣秀吉が亡くなってから、右近は加賀、越前、能登で福音の種をまき始めた。金沢に教会を建て熱心なキリシタンを招き寄せて教会共同体が成長していった。能登に与えられた知行地にも2カ所自費で教会を建てた。

１６１４年のイエズス会年報には「金沢は日本でもっとも栄えた教会の一つである」とまで報じている。しかし、その同年徳川幕府によるキリシタン禁令によって右近とその家族はフィリピンに追放されてしまった。しかし、残ったキリシタンたちは熱心な信仰を証ししている。今回地震の被害が大きかった七尾市に本行寺という寺があるが、右近らが追放された後に、加賀藩の高級武士のキリシタンの夫人たちがこの寺に送られ、幽閉されたとされる。この寺には「キリシタン秘仏」（胸元を開けると十字架が出てくる）や「長房公長刀」（長房：右近）、「混天儀」（天体観測器）、「地球儀」などが右近によって奉納されたことが寺の古文書に記載されている。

今回の地震において犠牲となられた方々の冥福を願うとともに被災された方々が早く立ち直り、市町村も早く復旧・復興していけますように、「ユスト高山右近の取り次ぎを願いましょう」。

高橋和希
（佐伯・津久見・臼杵教会主任）

けがれなき聖母の騎士聖フランシスコ修道女会修道院閉院のお知らせ

当修道院は諸事情により２０２４年3月31日をもって閉院することになりました。長い間、いろいろとご配慮頂いたことに心より感謝申し上げます。皆様の今後のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

総長　シスター　岡　立子
ナザレト修道院責任者
シスター永　サツキ

第3回生涯養成講座「共同体建設」としてのシノドス

聖書を通して深める信仰生活

大分カトリック会館で生涯養成講座が3月17日行われ、約20人が集った。

「皆さん、聖書を読み込んでいますか」。

講師のコンベツアル聖フランシスコ修道会松田清四朗師はこの言葉から始められ、2時間の講話の中で幾度もこの問いかけをなされた。師は、聖書をいわゆる教科書的な読み方ではなく、登場する人物に心を通わせ、人生体験を思い起こしながら読むように繰り返し勧められた。

また、イスラエルの民が、苦しみや悲しみを乗り越え、時には神に対して逆らうこともありながら、長い期間を経て真の神の民となったことを思い起こし、第2バチカン公会議を経てシノドスを歩んでいる私たちも、困難な状況にあっても、神に向かう心をもち続けるよう招かれた。

私たちの共同体でも、全てを知っておられる神に委ねること、そして、見失った1匹の羊を探すように、情熱的な信仰、シノダリティを追い求める姿勢が重要だと思う。

私たち信徒にとって、聖書の言語的理解だけでなく、御言葉として「聞く」ということがいかに大切であるかを悟らせて下さった師に感謝しながら、これからも生涯をかけて信仰生活、ひいては人生体験の歩みを聖書を通して深めていきたい。（最終回）

井下恵人　（大分教会信徒）

第２バチカン公会議の精神を話す松田神父

Voice

復活

3カ月に一度くらいに、電話で信仰の分かち合いをする友がいる。奉献生活の大先輩でもある彼女は、南の島で一人暮らしをしている。ある時、彼女は、〝あなたもイエス様に出会ったことあるでしょ？わたしはね…〟と若い頃の体験や、毎朝海辺で体操をし、海を眺めて、イエス様と出会っていると、元気に話した。私は、はじめに問われたことが、心に残り、長い電話の後も、そのことを考えていた。イエスとの出会いとは、当然、復活したイエスとの出会いだ。それは、自分自身にとってのイエスを見つめること、復活の光を意識することだ。出会いの多くがそうであるように、ある出会いの価値や尊さは、出会っているその時には分からず、時がたってからそれが、どれほど、かけがえのないものであり、まさに、御父の計らいであったと分かるのではないだろうか。そのような変化は、「物を見る目が開ける」（阿倍仲麻呂著『キリストとともに―世界が広がる神学入門』P381）という復活経験とも重なる。復活節第1週のミサの福音朗読箇所には、出会いの喜びと驚きが満ちている。ある神学者によれば、〝復活〟は、「起き上がらせていただく」「ささげて活かす」「いまも生きつづけている」「豊かに生きる」「ともに食事をして連帯する」「大切にしてゆるし尽くす」（阿部前掲書P380～389）の六つの意味に理解され、「いのちの可能性」を表現している。春は生命の息吹を感じる季節。日常のあれこれを良く果たし、風に吹かれて足元の小さな花に目をとめ、深く息をして、イエスがいっしょに歩んで下さっていることを思い続けたい。そうして〝主の死を告げ知らせ、復活をたたえよう。主が来られる時まで〟。

鬼束和代
（いつくしみの聖母会）